

日刊建設工業新聞

2月19日(水)
第19846号

記事 電話03-3433-7161 mail-ed@decn.co.jp 購読 電話03-3433-7152 mail-sa@decn.co.jp 広告 電話03-3433-7154 eigyo@decn.co.jp

発行所 日刊建設工業新聞社 〒105-0021 東京都港区東新橋2-2-10 電話03(3433)7151 <https://www.decn.co.jp/> ©日刊建設工業新聞社 20

230人集め 圧送技術研究会

近圧協、建築学会近畿
近畿生コンクリート圧送
協同組合(近圧協、共田昌
一理事長)と日本建築学会
近畿支部材料・施工部会

(主査・山崎順二浅沼組技
術研究所材料研究グループ



リーダー)は17日、大阪市北区の大阪工業大学梅田キャンパスで、第16回圧送技術研究会を開いた。写真。今回は「高流動性コンクリートの圧送性評価」をテーマに、2019年10月9、10日で行った第14回ポンプ圧送フィールド実験の成果を発表。約230人の参加者は実験で得られた知見を熱心に聴講した。

研究会では冒頭、近圧協の共田理事長が「産学連携によるこのフィールド実験と研究会は、骨材や材料の変化などによりコンクリートポンプでの閉塞事例が増えたことを発端として始まり、今に至っている。今回は昨年のJIS改正を受けて実施した高流動性コンクリートに関する実験の結果を発表する。これからより良いコンクリート構造物の構築していくためにも、本実験の成果を広く皆さんと共有していきたい」とあいさつした。

来賓の香川明生大阪府都市整備部事業管理室技術管理課参事は「昨年も非常に多くの災害が発生しており、皆さんと協力して防災・減災対策や国土強靱化対策を進めていく。大阪府・市では中長期的に多くのプロジェクトが進行中であり、皆さんとともに大阪・関西を盛り上げていきたい」と話した。研究報告として6人が実験・計測を通じて得られた知見などを紹介。発表後には中村成春大阪工業大学工学部建築学科准教授が総評を述べた。

報告テーマは次の通り。
▽テーマ1発表者(所属)。
敬称略。

▽第14回フィールド実験と室内分離抵抗性比較実験の概要 杉本勝幸(オーテック) 高流動性コンクリートの圧送前後のフレッシュコンクリートの性状の変化 岩竹秀昭(村本建設) 高流動性コンクリートの管内圧力および管内圧力損失 山田藍(竹中工務店) 高流動性コンクリートの各種試験による圧送性の評価 石清水隆(同) 高流動性コンクリートの圧送モールドの推定と閉塞危険性の評価 木村芳幹(コンステック) 最後まで浅沼組(浅沼組)。

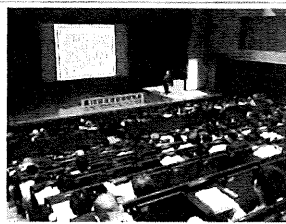
建設通信新聞

発行所 日刊建設通信新聞社
〒101-0054
東京都千代田区神田錦町3-13-7
電話(03)3259-8711
FAX(03)3259-8730
©日刊建設通信新聞社 2020

実験結果を共有 より良い構造物つくる

協会 研究会
コンクリート
生技
日本建築学会近畿支部材料
・施工部会と近畿生コンクリ
ート圧送協同組合(共田昌一
理事長)は17日、大阪市の大
阪工業大学梅田キャンパスで
第16回圧送技術研究会を開い
た。写真、セネコンや行政機
関、研究者ら約230人が参
加し、昨年10月に行ったフイ

ールド実験の結果報告などに
耳を傾けた。



呼び強度27・45のコンクリ
ートにおいて高流動性コンク
リートが規格品として扱えるこ
とになったことを受け、同コ
ンクリートの圧送性を確認し
ている。
報告者とテーマは次のとおり
(敬称略)。
▽杉本勝幸(オーテック) Ⅱ第
14回フィールド実験と室内分離抵
抗性比較実験の概要▽岩竹秀昭
(村本建設) Ⅱ高流動性コンクリ
ートの圧送前後のフレッシュコン
クリートの性状変化▽山田藍(竹
中工務店) Ⅱ高流動性コンクリ
ートの管内圧力および管内圧力損失
▽岩清水隆(同) Ⅱ高流動性コン
クリートの各種試験による圧送性
の評価▽木村芳幹(コンステック) Ⅱ
高流動性コンクリートの圧送モ
ードの推定と閉塞危険性の評価▽
山崎順一(淺沼組) Ⅱまとめ。

冒頭、共田理事長は「コン
クリートは年々進歩し、骨材
の種類も増えているが、それ
に伴ってポンプのトラブルも
起きるようになってきている。ま
た、JIS(日本産業規格)
の改定も行われていることか
ら、これらを踏まえたフイ
ールド実験を行っている。より
良いコンクリート構造物をつ
くるため、実験結果を共有し
ていきたい」とあいさつした。
講演では第14回フィールド
実験の概要説明や実験結果が
報告され、最後に大阪工大工
学部建築学科の中村成春准教
授が総評した。
この実験では、JISの
「A5308」が改定され、

(1) 2020年(令和2年)2月20日

今週の紙面

生コン業況調査、コスト増圧力続く

2面

土木製品決算、5社が増益

3面

セメント決算、4社が通期引き下げ

3面

フライアッシュ特集

4～5面

コンクリート新聞

THE CONCRETE SHIMBUN



徳島大学の橋本教授

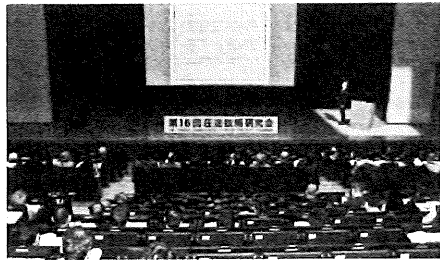
と述べた。

日本建築学会近畿支部と近畿生コンクリート圧送協同組合が17日に開いた圧送技術研究会に参加した徳島大学の橋本親典教授は「非常に有意義な研究会だ」とし、なかでも今回のテーマだった高流動性コンクリートについて「データを何らかの形で活用できれば」

高流動コンクリートは世に出て30年以上経つが、普及していない。「普及させるため、コンクリート工の生産性向上委員会でスランプを12cmにした。最終的に高流動コンクリートの普及につながれば」と見据える。その観点から、今回の実験を基に流動性の高いコンクリートが普及するきっかけになる良い実験だったと評価した。

建築学会近畿と近圧協 圧送技術研究会開く 関係者約230人が参加

日本建築学会近畿支部
材料・施工部会と近畿生
コンクリート圧送協同組
合は2月17日、「第16回
圧送技術研究会」を大阪
工業大学梅田キャンパス



(大阪市北区)で開いた。
今回のテーマは「高流動
性コンクリートの圧送性
評価」。ゼネコン各社や
コンクリート構造物の建
設に関わる行政機関の担
当者が参加した。

同組合の共田昌一理事
長は「コンクリートは年
々進化している。JIS規
格の改定もあり、今回は
高流動性コンクリートの
圧送性の確認などの実験
結果を報告する。より良
いコンクリート構造
物の実現に役立てて
いただきたい」と呼
び掛けた。

研究報告では杉本
勝幸氏(オーテック)
が昨年行ったフィー
ルド実験の概要を解
説した。
続いて、岩竹秀昭
氏(村本建設)が
▲最新の研究成果が
報告された

「高流動性コンクリート
の圧送前後のフレッシュ
コンクリートの性状の変
化」、山田藍氏(竹中工
務店)が「高流動性コン
クリートの管内圧力およ
び管内圧力損失」などを
報告。参加した約230
人の関係者は最新の研究
成果に聞き入った。

建通新聞

大 阪

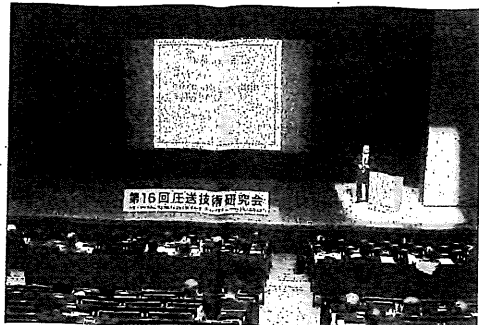
発行所 建通新聞社

大阪支社
大阪府中央区道修町2-6-7
〒541-0045 電話(06)6201-3927
大阪支局 電話(06)6201-3927

<https://www.kentsu.co.jp/>
新聞定価6ヵ月 42,000円(税込)

©建通新聞社 2020

発行紙
東京／神奈川／静岡／中部／岡山
香川／徳島／愛媛／高知



OTT梅田タワーで開かれた研究会

建築学会近畿
近圧協

圧送技術研究会開く 6つの成果報告



共田理事長

近畿生コンクリート圧送協同組合(共田昌理理事長)並びに日本建築学会近畿支部材料・施工部会の共催による「第16回圧送技術研究会」が十七日、大阪府北区の大阪工業大学梅田キャンパスOTT梅田タワーで開催された。コンクリート圧送工事に係る技術的課題に関する実験成果を発表するもので、両団体の関係者はじめ行政や大学、ゼネコン等の担当者約二二〇人が参加し、六つの成果報告が発表された。

技術研究会は、コンクリート工事でのポンプ工

法の技術向上と圧送性評価手法の確立、安全施工等を総合的・技術的に検証することを目的に、両団体共同で様々な課題等についてフィールド実証実験を実施し、その結果を発表して情報共有を図り、工事における品質と技術の向上に寄与することを目的に開催されている。今回は、「高流動性コンクリートの圧送性評価」をテーマに昨年十月の検証結果を中心に行われた。

開会にあたり共田理事長は、コンクリート工事の技術が年々進化し、材料も増えるに伴い、ポンプトラブルも増加したことから始まった研究会の取組みの経緯を述べながら、今回の研究会では、強度二七・四五のコンクリートで高流動性コンクリートが適合品として扱えるようになったことから、「昨年に実施した実証実験テストの成果を基に、その技術のあり方や傾向、特性などについて発表する」とし、今後も組合として「より良いコンクリート構造物をつくるために実験結果を共有していきたい」と挨拶した。

研究報告は次の通り。

(敬称略)

▽第十四回Field実験と室内分離抵抗比較実験の概要(杉本勝幸)

- 法の各種試験による圧送性の評価(岩清水隆(竹中工務店))
- ▽高流動性コンクリートの圧送前後のフレッシュコンクリートの性状の変化(岩秀昭(村本建設))
- ▽高流動性コンクリートの管内圧力および管内圧力損失(山田藍(竹中工務店))
- ▽高流動性コンクリートの各種試験による圧送性の評価(若幹(コンステック))
- ▽まとめ(山崎順二(近畿支部材料・施工部会))

建設新聞

令和2年/2020年
2月27日(木)

発行所
日刊建設新聞社
〒541-0043 大阪市中央区
高麗橋1-5-6(東店ビル)
☎06-6202-6670

本紙あんない

電話
編集課 (06)6202-6670
営業課 (06)6202-6861

FAX
(06)6202-8951

E-mail
代表 info@ca-press.com

ホームページ
http://www.ca-press.com

香川品監、28工場に合格証交付	2面
GNN、生き残りテーマに勉強会	3面
鹿島、トンネルヘロボット導入	3面
建築学会近畿、高流動コン実験成果公表	4面

コンクリート新聞

THE CONCRETE SHIMBUN

高流動コン圧送を検証

建築学会 近畿支部 実験で性状、品質確認



共田理事長

日本建築学会近畿支部材料施工部会が、この工法リーディンググループ(WG)と近畿生コンクリート圧送協同組合(共田昌一理事長)は2月17日、大阪市の大阪工業大学(梅田キャンパス)で圧送技術研究会を開いた。昨年10月に神戸市東灘区の生コン工場で行ったフィールド実験の結果を公表した。共田理事長はあいさつで近圧協の事業を説き、



生コンやJC Iの関係者も多数参加した

明したうえで、コンクリート技術は年々進化しており、2004年に産学連携でこのような実験の場ができた。今回は高流動性コンクリートを用いた実験の結果を発表する。この結果を我々としても良いコンクリート構造物を造るために活用していきたい」と述べた。昨年3月に生コンJIS(A5308)が改正され、呼び強度27、45のスランフロー管理された高流動性コンクリートが盛り込まれた。しかし、高流動性コンクリートの圧送性状については不明な事項も多い。そこで、昨



中村教授

の品質変化の状況を把握し、必要に応じてその対策を立てることを目的とした。ベント管やテーパー管の圧送状況については、メカニクス解明のための基礎資料を蓄積した。報告ではオーテックの杉本勝幸氏が

フィールド実験と室内分離抵抗比較実験の概要を説明した後、村本建設の村秀昭氏が高流動性コンクリートの圧送前後のフレッシュコンクリートの性状について解説した。岩竹氏は高流動コンクリートのフレッシュ性状の変化について各種フレッシュ試験での検討結果、データを発表した。竹中工務店の山田盛氏は高流動コンクリートの管内圧力および管内圧力損失について報告した。竹中工務店の岩崎水隆氏は各種試験による圧送の評価について、コンステックの木村芳幹氏は高流動性コンクリートの圧送モードの推定と閉塞危険性の評価についてそれぞれ講演した。大阪工業大学の中村成春教授は講演で各発表の概要とポイントを示すとともに、それぞれの良い点を取り上げて解説した。

コンクリート圧送



共田昌一理事長

JIS A5308の改正で呼び強度27・45のコンクリートにおいて、スランプフローで管理す

て報告した。

日本建築学会近畿支部材料・施工部会(主査・山崎順二・浅沼組技術研究所建築材料研究グループリーダー)と近畿生コンクリート圧送協同組合(共田昌一理事長)は2月17日、大阪市内で第16回圧送技術研究会を開催。昨年10月にサンコー(神戸市垂水区)の敷地内で実施した第14回ワールド実験の成果を中心に「高流動性コンクリートの圧送性評価」について報告した。

と組
学送
会協
建近
築圧

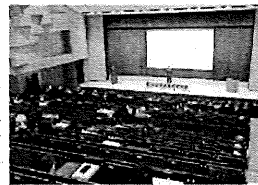
フローリング圧送性の知見報告 ワールド実験成果踏まえ

るコンクリート(高流動性コンクリート)がJIS適合品として扱えるようになったことを受けて、出荷体制が本格化する前にその圧送性を確認することを目的に行われた。大阪広域生コンクリート協同組合の中から選定した10工場における室内分離抵抗比較実験の結果も併せて報告した。

冒頭、近畿圧送協同組合(共田理事長が主催者を代表してあいさつ)、「生コンの使用材料が従来の川砂利・川砂から砕石・砕砂や高炉スラグ等に変化しており、これに伴いポンプのトラブルが頻発するようになった。2004年に産学連携でこうした問題について協議する場として圧送技術研究会が開かれ、今回で16回目の発表を迎えた。本日

は高流動性コンクリートの圧送性をテーマに、様々な発表を控えている。実験結果に基づいて、今後もより良いコンクリート構造物を作るために広く協力していきたい」と語った。

報告(敬称略)は、①第14回ワールド実験と室内分離抵抗比較実験の概要(杉本勝幸・オーテック)②高流動性コンクリートの圧送前後のフレッシュコンクリートの性状の変化(岩竹秀昭・村本建設)③高流動性コンクリートの管内圧力および管内圧力損失(山田藍・竹中工務店)④高流動性コンクリートの各種試験による圧送性の評価(若清水隆・竹中工務店)⑤高流動性コンクリートの圧送モードの推定と閉塞危険性の評価(木村芳幹・コンステック)⑥まとめ(山崎順二・浅沼組)の6編。



6件の報告があった

山崎主査はまとめの中ですと、JISの範囲内でスランプワーカビリティ)設定の自由度を高めることが今後必要になるだろう。スランプフローで管理するコンクリートを有効利用して、生産性向上や省力化・効率化に結び付けたいという思いがある。高流動性コンクリートの利用促進に向けて、大阪兵庫生コンクリート工業組合やJCI(日本コンクリート工学会)近畿支部、日本建設業連合会などが技術的内容の整備に取り組んでいる。各団体の成果を今回の実験結果と併せて活用し、近畿圏から高流動性コンクリートの推進を図りたい」と述べた。

セメント新聞

発行所 セメント新聞社
東京都中央区京橋3-12-7
電話 (03) 3535-0621(代)
URL: <http://www.cement.co.jp/>
購読料 1万円 42,240円
©セメント新聞社 2020

しっくい
浜 吟